

日本食文化の理解促進

1 実践事例について

世界的に見ても特徴的であると言われている日本食文化の概要についてテーマを指定し、グループごとに調べ学習を実施し、クラス発表させる。言語活動（記録・要約・説明・論述）を通して、日本食文化の理解を深めた上で、主体的に継承する態度も育成する。

2 学習活動の概要について

(1) 単元名

食生活の科学と文化

(2) 単元の学習目標

- ア 栄養、食品、調理及び食品衛生などについて科学的に理解し、食文化に関心をもつ。
- イ 各自の食生活の問題点を把握し、安全と環境に配慮した生活ができるように、現代の食生活の現状や問題点について理解を深め、主体的に食生活を営むことができるようにする。

(3) 評価規準

- 〈関心・意欲・態度〉 食生活の科学と文化、安全と環境に配慮した食生活に関心をもち、意欲をもって学習活動に取り組んでいる。
- 〈思考・判断・表現〉 栄養、食品、調理及び食文化などについて課題を見いだし、その解決を目指して思考を深めている。
- 〈技能〉 調理実習を通して技術を身に付けるとともに、食生活を主体的に営むために必要な情報を収集・整理することができる。
- 〈知識・理解〉 栄養、食品、調理及び食文化などについて理解し、食生活に必要な知識を身に付けている。

(4) 単元の工夫

- ア 自分の食生活を振り返り、各ライフステージにおける食生活の課題について認識させ、毎日の食事が健康と深く関わっていることを理解させる。
- イ 調理実習で愛知の郷土料理を扱い、実習を行うことで、郷土料理への興味・関心、日々の食事における活用への意欲を高めさせる。
- ウ 日本食文化について、調べたことをまとめ、伝承のための工夫についてICT機器を活用した発表をさせる。
- エ 日本食文化のポスター制作や食べ物の匂いの模型製作を行い、生徒保健委員会と連携して、食育推進活動として学校祭で展示発表をする。

(5) 主な学習活動

ア 題材の指導計画（全22時間）

学習項目（時）	学習活動（時）	言語活動に関する指導上の留意点
人の一生と食事（6）	食生活について考える（1） 食事と栄養・食品（3）	・発言の場面を増やし、考えや意見について述べる機会をもつ。 ・実習のまとめを記録し、科学的な調理について理解を深める。
食生活の自立と調理（10）	食生活の安全と衛生（2） 生涯の健康を見通した食事計画（2） 調理の基礎（8）	

食生活の文化 (5)	食生活と文化 (5) 本時 (3・4時) (別添資料1) (別添資料2) (別添資料3)	<ul style="list-style-type: none"> ・グループごとに日本食文化について内容を分担し、担当テーマについて調べ学習を行い、説明する事柄をまとめさせる。 ・まとめた内容を基に、日本食文化の伝承のための手だてを考えさせる。 ・グループごとに説明・発表させる。 ・説明や発表を聞き、日本食文化への理解を深めさせ、伝承についても考えさせる。
食生活と環境 (1)	これからの食生活 (1)	

イ 本時の学習 (19・20/22)

(ア) 学習目標

- ① 伝統食とその背景に関心を持ち、日本食文化について理解を深める。
- ② 今後継承したい日本食文化について考えを深め、継承のためにできることややりたいことを適切に判断し、表現している。

(イ) 本時の展開

- ① 前時の復習をする。(別添資料1)。
- ② 日本食文化の特徴について、グループごとに分担したテーマについてまとめができているか確認する(発表準備)。
- ③ 担当したテーマについて発表する(別添資料2)。
- ④ 各グループの説明・発表を聞きながら、ワークシートにまとめ、日本食文化の伝承について考えを深める(別添資料3)。



調べ学習・まとめ



グループごとの説明・発表

(ウ) 言語活動を通して思考力・判断力・表現力を育成するための手だて

【思考力・判断力・表現力の学習活動の分類】

- ① 体験から感じ取ったことを表現する。
- ② 事実を正確に理解し、伝達する。
- ③ 概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする。
- ④ 情報を分析・評価し、論述する。
- ⑤ 課題について、構想を立て実践し、評価・改善する。
- ⑥ 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる。

① グループ学習のまとめと発表（分類②④より）

日本食文化の特徴について、正確に理解してまとめさせ、分かりやすく伝達させる。
調べたことをグループで協議してまとめたことを、的確に論述し説明させる。

② 全体のまとめ（分類⑥より）

他のグループの説明・発表を聞き、食文化の理解と文化伝承について考えを深めることができたか
記述させる。

(エ) 評価の観点（思考・判断・表現）

① 日本食文化の特徴について、理解してまとめ、分かりやすく伝達することができたか。

② 資料を活用し、的確に論述し、説明することができたか。

③ 他のグループの説明・発表を聞き、食文化について考えを深めることができたか。

(オ) 発表・ワークシートにおける評価

別添資料4のように評価基準を定めた。

ウ 発展学習

(ア) 調理実習に愛知の郷土料理（みそ煮込みうどん、鬼まんじゅう、ういろうなど）を取り上げ、郷土料理への興味・関心を高めさせた。

(イ) 生徒保健委員会と連携した食育推進活動として、日本食文化のポスター制作や食べ物の旬の模型製作を行わせ、学校祭で展示発表した。

【郷土料理実習】



鬼まんじゅう



みそ煮込みうどん

【学校祭展示】



食べ物の旬の模型



日本食文化ポスター

エ 授業実践を終えて

(ア) 授業後の生徒を対象にしたアンケート調査結果

日本食の特徴については、全員が理解を深めることができたと答えている。さらに、毎日の食生活に生かし、伝承していきたいと回答した生徒は、およそ9割であった。また、日本になじんだ外国の料理にも興味があると4割弱が回答した。授業において、調べたことをまとめ、まとめたことを考えることはできたが、そのことを説明・発表することについては、思うようにできなかったと回答した生徒は4割程度あった。

(イ) 生徒のワークシートより

- ・感謝して食べる「いただきます」を伝えていきたい。また、なぜ外国の人はいただきますと言わないのか疑問に思った。
- ・食事のマナーでは自分の知らないものがあった。箸の使い方が悪かったり、知らなかったりする人が多いので食事のマナーは未来に伝えていくべきであると思った。
- ・日本食はおいしいだけではなく、見栄えや季節感などにもこだわることが分かった。周りの人に食事を通して伝えたい。
- ・各地域でそれぞれの郷土料理があってもおもしろいと思ったので、もっといろいろな郷土料理について知りたいし作ってみたいと思った。
- ・日本食文化は行儀や挨拶にしても意味がこめられている。興味深かったし、一つ一つを大事にしたいと思った。
- ・食の文化はそれぞれの国にある大切なものなので未来に伝えていきたいし、歴史にも興味をもった。

(ウ) 生徒の変容

何気ない暮らしの中の「日本食」に触れて、気候風土、島国のよさや四季のもつ特色(旬)、行事食といったこれまでの知識を整理し、学習意欲を高めた上で、新たに知識を得て考えを深めていった。各自が担当したテーマの調べた内容を伝えるだけでなく、出汁や発酵食品、郷土料理、うま味、献立、一汁三菜、マナー、挨拶の意味、「もったいない」という文化といった特徴についての発表を聞いて考えながら理解を深めた。さまざまな面から食文化は大切なものであることを感じ取ることができ、向学心に燃えている様子がみられ、講義形式による授業より活気があった。日本食文化を伝えていくためにできることは、簡単なことから壮大なことまであるが、自分にできることを考えるようになった。

人前で話をするということは、不慣れな生徒たちだが、コミュニケーション能力として重要であることを意識して取り組むことができた。自分たちがやるときの参考になるため、他のグループ発表を一層真剣に聞くことができるようになった。「もっとゆっくり」、「大きい声で」などと声かけをし、互いに励まし合う様子も見られた。

オ 授業実践のまとめ

日本食文化が世界中から注目されている昨今、その概要について関心をもち、正しく理解するとともに、主体的に継承する態度を育成する授業実践を行った。

時間数が限られるので、指定テーマの担当グループを決め、各自で説明する内容を調べ、考えさせた。授業後にはアンケート調査を行い、グループ発表では理解不十分であると感じられたところも確認し、教員が補足する際の参考にした。

発表や説明については、得意ではない生徒がほとんどであるが、ICT機器を活用したプレゼンテーションを取り入れたところ、スムーズに進めることができていた。発表を聞く態度も良好であり、意欲的にまとめ、内容の理解も深まった。

3 今後の課題

ICT機器を活用した説明・発表は、視覚にも訴え、分かりやすい。説明の不十分さも画面で補うことができるので、今後も他のテーマで活用したい

日本食文化の特徴を把握した上で、未来に伝えたい日本食文化や自分ができること等のまとめを行わせた。言語活動として、感じたことや思ったことを短文で口にするにはできても、文章にすることは難しく感じる生徒もあり、今後の学習における積み重ねの必要性を感じた。

発表後に質疑応答などを入れて、他の人との意見交換を図ることができなかった。互いの考えを伝え合い、集団の考えを発展させていく展開をもつようにしていくとよりよいのではないかと考えられる。

家庭科ではこれまで、実習や体験活動を実践しているが体得したことについて発表を行い、感想をまとめているが、これでは思考力、判断力、表現力を身に付けることができる活動であるとは言いがたい。家庭科の目標である「生活課題の主体的な解決能力や、生活の向上充実を図る能力と実践的な態度の育成」につなげるために、生徒が考えたり発表したり考えを深めあったりする自主的な活動場面を設定していくべきである。言語活動を取り入れ、表現や説明、伝達、論述などを行わせることで、設定した学習目標に確実に到達できるようにしたい。

<参考・引用資料>

『高等学校学習指導要領解説家庭編』 文部科学省 2010年5月

『評価の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料 高等学校 共通教科「家庭」』

文部科学省 国立教育政策研究所 2012年7月

『家庭総合 自立・共生・創造』 東京書籍 2012年3月検定済

『食育ガイド』 内閣府 政策統括官付食育推進室 <http://www8.cao.go.jp/syokuiku/>

『日本食文化理解促進のための学習ツール「私たちの食文化ってどんなもの？」』 農林水産省

<http://www.maff.go.jp/j/keikaku/syokubunka/index.html>